

平成 27 年度 保育サポーター研修会

と き 平成 28 年 3 月 13 日（日）10：00～

ところ 山口県医師会 6 階大会議室

〔報告：山口県医師会男女共同参画部会理事 寺井 佳子〕

第 7 回目となった今回の保育サポーター研修会は、サポーター 28 名、子育て中の医師 1 名の参加があった。

会ではまず、山口県医師会男女共同参画部会長（保育サポーターバンク運営委員長を兼任）の黒川典枝先生から、バンク設立の背景や経緯、保育相談の仕組み、活動状況、賠償責任保険などについての説明がなされた。山口大学医学部医学科に占める女子学生の割合が 40% に届き、山口県内で医療に従事する女性医師が年々増加している昨今、出産・育児と仕事を両立できるための支援として、この保育サポーターバンクの活動が非常に重要で、山口県の医療環境をも支えていることを強調された。

講演

この研修会では、子どもとの関わりにおいて重要である「子供の心理、病気、あそび」などについて専門家をお招きしてご講演をお願いしている。今回は、「子どもの救急疾患について」で、その中で「子どもの誤嚥・窒息事故」「食物アレルギーとアナフィラキシー」をテーマに、山口大



学医学部附属病院小児科の岡崎史子先生のご講演を拝聴した。岡崎先生は二人の男の子の母親で、ご長男が産まれて早々から仕事復帰をされ、二度保育サポーターをご利用されたため、ご講演の途中にご自身の経験談のお話をされ、先生も仕事復帰の時は、保育サポーターの方にとっても助けられたと感謝しておられた。

先生のご講演は、とてもわかりやすく有意義なお話であった。小児の誤嚥発生時の対応（1 歳未満の乳児と 1 歳以上の幼児ではやり方の違いがある）や、心肺蘇生法の仕方についてとても勉強になったが、子どもが誤嚥したときは、できるだけ早急に心肺停止前に誤嚥した食物を除去することがとても大事であることがよく理解できた。ま



た、食物アレルギーとアナフィラキシーについても、岡崎先生がご専門にされていらっしゃるため、とても詳しくご講演して頂いた。アナフィラキシーショックに対するエピペンの使い方や、食物アレルギーの最新の考えについても学ぶことができた。サポーターの皆様もとても熱心に講義を聴かれていた。

誤嚥発生時の対応

【誤嚥が疑われる症状】

- ・突然の咳や喘鳴、呼吸困難、顔面蒼白、発声困難、嘔吐など

【小児の院外蘇生例】

- ・呼吸停止のみでは蘇生率50%以上
- ・心肺停止では蘇生率は著しく低下する

↓

心肺停止前に誤嚥した食物を除去することが重要！！
目撃者の有無や適切な応急処置能力が予後を左右する

誤嚥発生時の対応

異物が取れるか、救急隊と交代するまで続ける

心肺蘇生

1歳未満の乳児

1歳以上の幼児

背部突き上げ法

5回ずつ交互に

腹部突き上げ法（ハイムリック法）

併用する

背部叩打法

食物アレルギー治療の新しい考え方

「食物アレルギー診療ガイドライン2012」

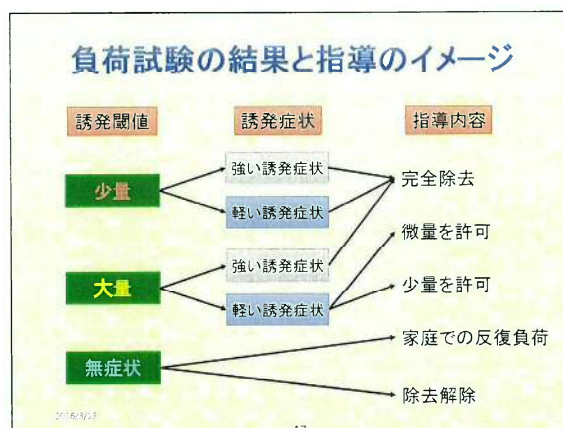
1. 疑わしきは除去から必要最小限の除去へ
2. 原因食品でも安全量なら摂取可能

↓

負荷試験が**陽性**でも、
摂取可能な量を見極めて摂取する

ねらい

- ・生活の質の向上
- ・少量から増量していくことで体を慣らす（免疫療法）



昼食懇談会

講演後、地区別の3つのグループに分かれ、保育サポーターバンク運営委員会のメンバーも加わり、昼食を摂りながら懇談会を行った。これまで長い期間登録されているにもかかわらず、実働経験のないサポーターの方々もおられ、申し訳ない気持ちになったが、今後もサポーターの登録を続けていかれるようお願いをした。実働はないけれど、たくさんの方々が、サポーター登録をさせていただいてバックアップ体制が整っているということが、利用者には大きな安心につながっていると深く感謝している。保育サポーターの方々は、明るく優しく、愛情が深く、保育の経験が豊かな方が多く、安心して子どもをまかせられると切に感じた。今後、育児支援が必要になる若い医師の方々も、この制度を知っていただき、是非、山口県で仕事と子育ての両立をしていただきたいと心から願っている。

